「科学技術とキリスト教」　2025年12月15日

キリスト教の月刊誌『福音と世界』の12号は「科学技術とキリスト教」を特集している。科学技術は途方もなく進み、人間を置き去りにしているようにも見えるこの頃である。進んだ科学技術と、「人間は神にいのちを与えられた」と捉えるキリスト教はどのような関係にあるのかを模索した論考が寄せられている。医学哲学を専門にする杉岡良彦氏が「生命科学技術とキリスト教『いのち』の問題とどう向き合うか」寄稿している。興味を引かれ、考えさせられたので、十分には理解できないが、紹介し、感想を書きたい。

杉岡氏はまず、「本稿では生命と生命現象を峻別し、生命科学は観察可能な生命現象を研究対象とすると理解する。一方、生命は『いのち』とも言い換えられ、キリスト教における『永遠の命』ともかかわるような、より広義の概念として理解する」と、「生命現象」と「いのち」を分けて考えると言う。生命科学技術の進化はキリスト教にとって好ましい点と好ましからざる点がある。前者は、医学が人間を病や様々な苦しみから解放しつつある点である。医者・医学者たちは、主イエスが弟子たちに「病気をいやす力と権能をお授けになった」と言われた言葉を実行し、多くの人々に大きな恩恵を与えてきた。後者は、生命科学技術が「いのちの支配者は人間である」という傲慢に陥る可能性があるという点である。遺伝子情報全体はゲノムと呼ばれるが、特定の遺伝子を操作させるような、新しい遺伝子を組み込む技術（ゲノム編集）が開発されたことである。ゲノム編集は情報を受け継がれることがないため、治療などであれば有効で、問題はないが、生殖細胞や受精卵は次世代以降にも遺伝情報が伝わるため、特別基礎研究を除いて許されていない。まして遺伝子操作した胚を「人又は動物の胎内に移植」することは固く禁じられている。ところが、中国の研究者が、ゲノム編集を行い、エイズウイルスに感染しにくい双子が生まれたと発表した。遺伝子情報を操作することによって、ある特定の能力を備えた人間（デザイナーベイビー）を作り出すことも可能になり、このことへの欲望は大きい。そうなると、生命の支配者は、キリスト教が主張する「神」ではなく、「人間」であることになる。杉岡氏は、キリスト教の「いのち」に対する理解を三点挙げている。①キリスト教は「いのち」をこの世的なものに限定せず、信仰によって保証される「永遠の命」を重視している。この信仰は、現世的な欲望を相対化し、欲望の肥大化を押さえる。②キリスト教は神や隣人との交わりの中で「いのち」を理解し、いのちの中核ともいえる「人格」は他者との関係性において成立している。③生命科学技術は苦悩を取り除くことで人を救おうとする。しかし、キリスト教は、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない（使徒14:22)」という言葉のように、苦悩に意味を見出してきた。苦悩がいのちに与える意味について生命科学技術は語らないが、苦悩の意味を宗教や哲学など、広い文脈で理解することが重要である。杉岡氏は、「生命科学技術を支える思想」と「生命科学技術とキリスト教の目的」について論じている。生命科学技術の使命は目の前にある生物学的な諸問題を解決することである。しかし、「いのち」を人間が操作する生命観を結果的に助長してきた。出生前診断やゲノム編集を過度に促すのは、欲望を限りなく刺激された結果ではないか。治療困難な人を支え、苦痛を和らげるためには生命科学技術の発展だけでは十分ではない。主イエスの「人に仕える者になりなさい」という言葉に促され、隣人愛の実践を医療の中に提供していくことが求められる。生命科学技術は正と負の側面をもつ。キリスト教的立場から生命科学を支える生命観を提示し、「いのち」に関わる人間の「関係性」と「苦悩」に基づいた深い議論が必要であると、論考を締めくくっている。